

平成28年第3回

仙南地域広域行政事務組合
教育委員会定例会会議録

平成28年9月30日開議

平成28年第3回仙南地域広域行政事務組合教育委員会会議録

1. 召集日時 平成28年9月30日（金） 午前10時
2. 召集場所 仙南芸術文化センター会議室
3. 出席委員 教育長 佐藤隆夫, 委員 川島陽子, 委員 佐山富夫, 委員 佐藤茂廣
4. 欠席委員 委員 船迫邦則

5. 説明のため出席した者

教育次長兼仙南芸術文化センター所長 水戸雅彦
 主幹兼教育係長兼文化振興係長 黒澤良, 仙南芸術文化センター次長 玉渕博之
 主事 大内連太郎

6. 開 会 午前10時

7. 平成28年第1回教育委員会臨時会会議録の承認について

佐藤教育長	会議録について承認を求めます。
(質 疑)	<ありません>との声
佐藤教育長	質疑ないものと認め、会議録を承認します。

8. 会議録署名委員の指名

佐藤教育長	私のほか、佐山委員にお願いいたします。
佐山委員	はい。

9. 諸報告

報告第1号 仙南地域広域行政事務組合教育委員会委員の就任について

仙南地域広域行政事務組合教育委員会委員の任命について、平成28年7月26日、当組合第230回議会定例会において、船迫邦則柴田町教育委員会教育長を任命することに同意を得たことをご報告申し上げます。なお、任期は平成28年7月26日から平成31年3月31日までである。

(質 疑)	<質疑なし>
---------	--------

報告第2号 平成28年6月から同年9月までの主な事業等の経過について

教育委員会事業について、黒澤主幹より資料1にてご説明申し上げます。
 仙南芸術文化センター事業について、玉渕次長よりご説明申し上げます。

(質 疑)	
佐山委員	9月19日のあずなびあまつりで、この来場数が2,000名とありますが、駐車場は大丈夫だったんですか。
玉渕次長	まず参加者数は、ボランティアさんが多くて、基本的に駐車場を拡充しています。仙南広域の駐車場を借りたり、スタッフのほとんどは成果市場さんの駐車場をお借りしたりしていました。あとは公演事業と異なっていて、比較的時間が長いんですね。視聴覚教材センターのブースは午前中から行って、かえっこを中心に動いているんですが、かえっこは1時から4時半までということですからかなり分散型になるんですね。2,000名が同時に集まるということではなくて、むしろお客さんがひっきりなしに出たり入ったりというような状態です。もしかすると一回出

玉 渕 次 長	てまた戻ってきた人に対してカウントしている可能性はゼロではないんですけども。2,000名超えというのはかえっこの事業を始めてから初めての数字でした。
佐藤教育長	色々なダンスや新しい企画とかございまして、広域が仙南2市7町の中心となって盛り上がりがあるのではないかと。音楽とかを中心にして、それを維持されているところは、その社会の文化を発展させている1つの指標になると思います。そういった意味では、最終的な数字が楽しみですね。
佐藤教育長	阿武隈急行はその沿線に関わる自治体で出資して第3セクターみたいな感じでやっておりますが、この阿武隈急行の事業についてももう少し詳しく教えてください。
玉 渕 次 長	阿武隈急行の事業チラシをご覧ください。このチラシは裏表になっていまして、紫の方が大人向け、緑の方が親子向けになっています。緑の方から説明いたします。午前中は子どもたちに来ていただきまして、電車に乗ることが初めてという子をターゲットにしておりますが、角田駅集合になっていて、電車の中でワークショップを行ったり、電車から出て歩いて散歩をして、行き先の方でワークショップを行ったりします。アーティストが付いて単に散歩するっていうだけでなく、基本的にコンセプトとしては、えっさこ広場という当ホールで展開している事業を遠足バージョンにし、遠足をするんだったら電車がいいということになって生まれた企画です。アーティストと一緒に動くということなので、参加しながら体験して楽しんでいただくという企画になっています。遊びももしかすると、色んなことが変幻自在に飛び出すかもしれない、そういうアーティストを起用しているので、子どもたちに合ったプログラムを展開して楽しんでいただけるんじゃないかなと思います。次に、大人の散歩なんですけど、これは大人バージョンですね。これも同じように角田駅集合になっていて、電車の中でも行きますけれども、行き先の方に行って、そこでまた新しい体験をしていただくという。参加者がビデオを持って、映像を撮ったりして、もしかすると何かそういうのであぶきゅうCMみたいなのを自作で作ってみようかみたいなことにもつながったりとか、枠線がすごく張り巡らされたような内容の濃い事業になっています。これも柏木陽さんと片岡祐介さんという二人のアーティストに来ていただいて、来た方々と一緒にプログラムを作っていく、そこで映像作品になるのか、表現になるのか、そんな体験型のプログラムになっています。
佐藤教育長	昨日、阿武隈急行の社長が来て、絵のコンクールの審査をしたんですが、彼らは非常に利用が増えるのを願っているんで、阿武隈急行との連携も、あるいはマスコミとの連携も大事なのかなと思います。こちらでは事業をするというのが目的だと思うのですが、今後のためにもそういった繋ぎをしてもらえればなと思います。
佐藤教育長	AZ9ジュニア・アクターズの事業で、「お話を作る」、「アイディア出しをする」と「クリエイティブドラマ作り」というのは、新しい企画だと思うのですが、このコンセプトというか、仕掛けや内容について教えて欲しいのですが。どなたが指導しているのですか。
教 育 次 長	これは渡部ギユウさんがやっています。これは担当からご説明します。
大 内 主 事	クリエイティブドラマを作るのは毎年やっていることで、子どもたちから出てくるものを取り入れて劇を作るという内容です。
佐藤教育長	子どもたちに色々な投げかけをして、出てくるものをメモしたり、取り上げたりする訳ですね。子どもたち自身で1つのストーリーを作るということですね。

大内主事	はい。そういったことで、子どもたちの創造力をつけるという。
佐藤教育長	この7月10日のお話を作る、アイデア出しというのも関連あるんですか。
大内主事	このアイデア出しで出てきたものを、うまく劇に取り入れる形でクリエイティブドラマを作るということをやっているの、そのアイデア出しも子どもたちの地元に残る歴史とか、こんな面白い人がいたとか、色んなネタを持ってきてもらって、お話を作るという。
佐藤教育長	これは前からやっていたということで、これからも色んな形で発展させて欲しいなと思います。一方的に中央から来て文化芸術を与えるだけでなく、自ら文化そのものを作っていく。せっかくシナリオライターがいるのだから、子どもたち自身にどう作るとか、2時間の公演とかだけでなく、5分か10分くらいの中でやる演劇とかを子どもたちが作れる。或いは、中学生や高校生が作れる。或いは、そのシナリオライターのグループが大河原にできて、ラジオとかで放送されたり、東京の方にテレビのドラマシナリオを書けるような技術とか能力を育てて行って欲しいなと。そうすると、地方から出た地方に非常に色濃い作品が5年後か10年後あたりに中央に載るという戦いをして欲しいと思います。東京から優れた文化を地方に分け与えているだけでなく、東京の方が田舎に来て、ビックリするようなものが出てきている。優れた能力がいっぱいあるんだという。そういうのがクリエイティブドラマを作ることの発展にあっても良いのかなと思います。水戸教育次長もロンドンに行って、地元に着して演劇を楽しんでいる、盛り上げているというのを見てきているので、そういうのを取り入れて欲しいです。合宿までしていますし。何人くらい入っているんですか。学年はどれくらいですか。
大内主事	基本は小学4年生から6年生の22名です。
川島委員	この子たちは毎年参加しているんですか。積み重ねて上達していくとか。
大内主事	今いるのが、22期から24期生なんですが、22期生の今いる子は3年間やっています。
川島委員	それを見通して参加しているんですか。
大内主事	4年生から入って、22期生なので、今は6年生です。
佐藤教育長	ということは、この22名というのはAZ9の子どもたちということですか。AZ9の子どもたちがシナリオ作りに協力する形で、自分たちの町や地区の色んな文化とか伝統とか歴史とかを、自分たちで調べてきて持ち寄ると。それをメモしながら、ミュージカル作りの材料にする訳ですか。子どもたちも自分たちが言ったことが、劇の中に出てくれば面白いでしょうね。自分たちが演じているときに、これは私が言ったことだとか、僕が注文したことが出てくるだとか。でも、子どもたちが実際に創作して演劇を作っていくという形に発展すれば良いかなと思います。誰でも持っている才能に火をつければ、もしかしたら何千人、何百人というAZ9の参加者から俳優が出るとかというのと同じ形で、持っている才能が伸びる方もあるかもしれないので、これからそういう見方もして欲しいです。
佐藤(茂)委員	こういうのが昨年の公演の蔵王の物語とか繋がってきているんですか。
大内主事	昨年ですと、蔵王をテーマにしたときに、例えば蔵王音頭とか。あれは子どもたちから出た意見なので。子どもたちの方から、お祖母ちゃんが踊れるなどの話が出て、一緒に踊ろうということになり、実際の公演でも共演しました。
佐藤教育長	すごく良いことですね。

大内主事	今年ですと、村田のそら豆をテーマにしているので、また村田のどこかと一緒にできればなと思っております。村田の農家さんか。
佐藤教育長	ミュージカルの核になるところに子どもたちの発想があったというのが良かったです。それをまとめるシナリオライターの創造力があるんでしょうけど。
佐藤教育長	えぞこアンサンブルで過去最高と聞いたが、何か魅力的なものがあつたり、盛り上がりがあつて行くということになっているんですか。
玉渕次長	ウインドアンサンブルに関しては、毎年テーマを設けて、そのテーマに沿ってストーリーが展開するように演奏会を行っています。やりたい曲を皆で選んだりもしていますが。初めの頃は発表会から始まって、少しずつテーマ性を持ち始め、今年は海をテーマにして、映像を視聴覚教材センターのプロジェクター2台を使用して映し出しながら、映像を見ながら演奏会を楽しんでもらいました。この映像もウインドアンサンブルのメンバーが夜な夜な一生懸命作っていました。ギターアンサンブルは活動休止になるくらい一度落ち込んだが、そこからギターの魅力を皆に伝えようということで、苦勞しているのは想像できますが、まったくやったことがない方々にワークショップを行い、集めて育成をしています。今は2部制になっていて、元々やっている方々が1部制であつて、その下の方にフレッシューズというものがあり、一緒にコンサートを作るという輪の作り方が技術的にアップしたと思います。演奏スキルというと、初代の方が良かった時期もあります。音楽性が違って幅ができたという。人数が減った分少人数で演奏するシーン、全体で演奏するシーンと、コンサートの作り方を含めて上手くなったと思います。最初は平土間ホールでやっていましたが、入らなくなってきたので、大ホールに移ってきてからは300人、400人になり、今年500人を超えました。
佐藤教育長	2部制ということは、300人ずつぐらいを2回ということですか。
玉渕次長	平土間ホールでも発表は1回だけでした。
佐藤教育長	600人は入らないですね。
玉渕次長	そうですね。200人が限界ですね。600人となると大ホールでも2階を開けて、少し入っているぐらいですね。500だと一階はほぼ満席です。
佐藤教育長	この大ホールは満席だと800人くらいですか。
玉渕次長	全体だと800人ですね。
佐藤教育長	この643人というのはすごく大きな数字だと思います。プロジェクターで映し出すという話がありましたが、丸森の齋理幻夜でも南米の曲をやるときに、ドローンで撮影した丸森の映像を映したら、ものすごく盛り上がりました。演奏を聴いていると空を飛んでいるような気持ちになりました。音楽と映像というのは相乗効果があるんですね。丸森ではドローンの学校が10月から始まるんですが、そういうところと連携しても良いかなと。
川島委員	男声合唱団はメンバーが集まらないとか、固定化して、高齢化していったら、男性の大きくて良い声を聴かせたいのだけれど、だんだん魅力が少なくなっていくということを他所では聞くんですが、えぞこホールではそういうことがなさそうですね。
玉渕次長	今はないですが、その問題は常に抱えていることではあります。男声合唱というジャンルそのものが、若い世代の人たちにとって魅力が感じられるものかということ、実際にやっていない方が多くて分からないんですよ。合唱そのものでいうと、年配者の方が多いというのは事実で、将来的には問題になっていくだろうと思ってい

玉 渕 次 長	ます。その中でも歌に対する情熱というのは、人一倍あって、メンバーの活動の熱さというのは、年々上がっています。
川 島 委 員	このレッスンは夜にあるんですか。休みの日とかですよ。そうすると、働いている人たちでも、レッスンに参加できるんですよ。
玉 渕 次 長	基本は金曜の夜にやっています。団長さんは現役で働いている方ですし、他にも現役で働いている方はいらっしゃいます。もちろん現役を卒業して、楽しみでやっているという方々も多いです。
川 島 委 員	今、若い人で高校でも合唱コンクールってありますよね。中学生くらいの男の子を合唱に引っ張るのは難しいんですけど、高校生くらいになると楽しさが分かって、先々もやってみたいと思うんですけど、実際に社会に出てみるとレッスンに行く時間がないということをちらほらと聞いたことがあるので、多分働きながらやるのは難しいのかなと思います。或いは、年配の方に合わせた時間帯がレッスンなのかなと思ったので聞いてみました。合唱をしたいと思っている人は潜在的にはいるというのは話を聞いていたんですけど、そういう人が来ると良いなと思いました。
玉 渕 次 長	魅力の1つに男声合唱ってほとんどないんです。女性が中心になっている合唱団は多いのですが。非常に重宝されます。
佐藤教育長	こういった事業の中で地元の人起用とかあると良いなと思います。地元の人を大事にした発掘があると良いと思いました。
佐藤教育長	ガムランの演奏で失神したというところの内容を聞きたいんですけども。演奏者が高揚して高まって行って、物憑きみたいになって倒れたんですか。
教 育 次 長	そういうことです。倒れる人もいますし、暴れる人もいます。ガムランの音楽はポリリズムの複合的な音楽で、単純な音楽を繰り返して行って少しずつ変化していく音楽なんです。トランス状態になるタイプの音楽なんです。曲によっては演奏者がトランス状態になって倒れたり、色んな状態になることがあるんです。
佐藤教育長	これは神とか宗教的なものもあるんですかね。日本で言えば神楽みたいな神に捧げるような。
教 育 次 長	はい。そういう性質はあると思います。
佐藤教育長	トランス状態ともありましたが、高揚感が高まってくると思うんですよ。日本で言うと、お経を詠み上げながら、そういう世界に入ってしまうということがあるんですよ。そういう音楽だということで、日本の太鼓や神楽に通じるものがあるのかなと思いました。
佐 山 委 員	このえずこシアターの韓国公演は、何語で話すんですか。
玉 渕 次 長	通訳の方に入ってもらって、国内の方も介して、あちらでもスタッフで日本に留学していたという若い人たちがいました。
佐藤教育長	日本語で演劇をする訳ですか。
玉 渕 次 長	今回は字幕を作って、字幕を作るところから通訳の方に入っていて、あちらでは字幕をオペレートしながらやっていました。
佐藤教育長	意味が分からなければ、どんな演劇か分からないですよ。
玉 渕 次 長	はい。今回は台詞劇でしたので。
	<質疑なし>

10. 議事

議案第1号 仙南地域広域行政事務組合教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況についての点検及び評価について

平成28年8月8日に行った教育行政点検評価員会議における平成27年度仙南地域広域行政事務組合教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況についての点検及び評価の結果について、水戸教育次長より別紙資料2にてご説明申し上げます。

(質 疑)	
佐藤(茂)委員	視聴覚教材が頻繁に使われる時代とそうでない時代が交互にあると思うため、残っていないといけないと思います。16ミリフィルム教材を見ると、利用回数は減ってきています。色々な事情はあると思いますが、この16ミリフィルムに関しては、どこの分野で使われるのが多いですか。例えば、学校分野で使われるのと、社会教育で使われるのとどちらが多いのか。学校教育だとすれば、どういう貸し出し内容の貸し出しが多いのか、その辺を教えてもらえると、学校の先生方にPRもできるのかなと思います。映写機の講習会の主催者を変えると書いてあって、経過報告でも主催者が変わった講習会をやってみて、実際にどうだったのかを併せて教えてもらえると。
黒澤主幹	それでは最初の点についてお答えします。16ミリフィルム教材については、学校教育ではほとんど使われておりません。学校教育で使われているのはDVDで、DVDでも長さによっては使われる、使われないというのがあります。この前もお話ししましたが、NHK for SchoolというNHKさんで出している短い5分から10分のコンテンツがインターネット上にあります。それを先生方が選択して、電子黒板やプロジェクターを使って、教室でそれを見せながら、授業をするという形を取っている学校が多くなっているようです。昔は15分の教材が主だったんですが、15分では長いと言われるんですね。45分の授業の中で15分も取られちゃうと、なかなか厳しいと。短くコンパクトにまとめたものの方が、先生方にとっては使いやすいということで、DVDの中でも全部見せる訳ではなくて、そこに合ったところだけを見せることができますので、そういった使い方をしていただければありがたいと思ってPRはしています。社会教育の方では、幼稚園、保育所、児童館で先生方は熱心にお使いいただいてまして、子どもが画面に集中するそうです。映写機を回して、実際に始まると、今まで騒いでいたのが大人しくなって、画面に集中して見るという。ある程度、部屋を暗くしないと上映できないということや、短い長いもあるのですが、アニメーション関係が主に借りられています。昨年度、整理をするということで、300本くらいに減らしていますが、アニメーションを中心とした作品を貸し出ししております。その次になんですが、16ミリ映写機の講習会についてですが、こちらまで来るのが大変だということもあり、こちらから行きましょうということで、受けたい方がいるところに行きますよということで、今年度は出前講座でやりました。先輩の先生から引き継がれていて、まだ児童館や保育所の先生方で認定証を取りたいという人がいます。今は映写機が作られておらず、部品も作られていないということで、映写機が動かなくなったり、検査機自体も当センターで検査できなくなると、貸し出しができなくなります。色んな状況で難しくなっているのですが、いずれかの段階で止めなくてはいけない時期が来ることは間違いないです。まだ残っているもので、限りなく利用してもらえるとということで、残っているものだけでも使ってもらいたいと思います。

佐藤(茂)委員	それでは出前でする講座は好評なんだね。
黒澤主幹	人数が少なくても開催できるということで、団体さんではありがたいみたいです。
佐藤(茂)委員	私も若いときに講習会に出た覚えがあるんですけども、今は学校の先生方も講習会を受けないと操作できないのでしょうか。
黒澤主幹	昔のメディアカリキュラムの時代には、必ず学校の先生は受けないと駄目だということもあったのですが、今は持つ持たないは個人の自由になりました。もちろん当センターのフィルムを映すためには、認定証がないと映せません。
佐藤(茂)委員	今話を聞くと、もう新規のフィルムの購入はしていないんですね。
黒澤主幹	はい。まだ売っていますが、もう買っていません。
佐山委員	スマホからプロジェクターに映せる機材の整備は、これからかなり活用されてくるんじゃないかということで、要望があれば整備していきたいというよりも、むしろこっちから積極的にこういうものを整備しますということをお知らせして欲しいです。調査することが1つの情報発信になるから、調査もしながら。各市町の教育委員会によって、ICTの取り入れ方にバラつきがありますので、その辺を刺激していただくためにも、視聴覚教材センターから刺激を与えていただければ、各学校、社会教育関係でも、こういうものを積極的に活用していくんじゃないかなと思います。その辺のところをよろしく願いいたします。
佐藤教育長	今のお話にございましたように、視聴覚教材センターのコンセプトというのが、これから変動していく中で、視聴覚教材を整備し、作りながら、アーカイブという形で保持していく。そして、それを大事に使っていくというのが、1つの大きな目的だと思うんですね。情報教育とかICTとかは文部科学省も各学校で必ずやりなさいと4年後の指導要領で出るようです。所謂情報社会は、1980年前後にインターネットが生まれたときに大きく変わったんですね。インターネット以後の社会は、それ以前の社会と全然違う。つまり、金融などの情報を一瞬にして受け入れたりしながら、これからの世界が作られたんですね。今、インターネットを通して、世界中の富が1つの国、2つの国ぐらいの予算が、行ったり来たりを一瞬の内に行っている訳ですよ。そういう中で、各個人が持つ情報を取る、通信料を払うというのは、税金のようなものなんですね。一人ひとりに必ず来ますから。子どもたちにタブレットとかスマホをどういうふうに使いなすかを、世の中を生き抜くための1つの手段として必要になってくる。今、佐山委員さんから言われたように、スマホからプロジェクターみたいな形で、教育の中にいかに活用できるかという問題もあるので、タブレットの話も私は何年も前から話しておりますが、私の町でもタブレットとプロジェクターを買うということで予算化しております。まだの市町もあるため、これをセットで貸し出すものを買っても良いのかなと思います。予算がどれくらいか試算はできないんですけども。プロジェクターとしても、大きくて非常に強力なものがあり、少し周りが明るくてもはっきり映る良い機械があると思うんですけども、2台か3台あるんですか。
大内主事	新しく大画面でもはっきり映るのは2台です。
佐藤教育長	研究会が被っても使えるように、予算が許す限り整備してもらって、視聴覚教材センターの存在感をもう少しアピールするということで、よろしく願いします。
佐山委員	スマートフォンなどで簡単に作成した短い動画教材というのがありますけども、自作視聴覚教材発表会で制作者が固定化しているという課題もあります。例えば

佐山委員	中学生でも動画投稿サイトに投稿している感覚がありますよね。このままだと素晴らしい作品と全然できない人の格差が物凄く広がっていく気がするので、コンクールでなくて、映像のお祭りみたいなもので募集をかけていくような方法を工夫してもらいたいと思います。子どもたちは作成できない訳ではない。ただ肩肘を張って教材みたいな形になると、そこから手を引きたくなるので、動画投稿サイトでも出てくるような感じで良いということで、広めていただければ良いかなと思います。
佐藤教育長	視聴覚教材センターで全国大会に出すというのがあると思うんですが、それとは別に5分間以内でコマーシャルみたいなものを作るような。
佐山委員	そうしないと一般の人たちが制作したいと思う人が出てこないんじゃないかと思います。
佐藤教育長	視聴覚教材の作り方ということで、出前講座もしていますが、良い作品を見ると、こんなもの作れないと思ってしまう。これでも良いんだよという部門もあって、学校を主体にして、子どもたちが作った3分以内のコマーシャルみたいなものを作っていく。あんまり手がかからない部門があっても良いかなと思います。今年度からは無理でしょうけど、次年度に向けて考えていただいて、これからの盛り上がりのきっかけになるかと思います。
川島委員	視聴覚担当の先生など、各学校で決められているんですけど、私の経験では視聴覚やICTに強くはあるんですけど、それを教育に活かすということをあまり意識していなく、機材を操作することが得意な人が多い感じがします。会議があっても職員に情報が伝わらなかったり、ましてや子どもたちや地域に情報を発信する意識のある人はなかなかいないと思います。会議に行っても行ってきたという報告だけで、それをどう活かせるかまではいかないことが多いです。会議や研修会で出た情報をどのように先生方が発信しているのか、その結果についても話題に出してもらおうと、自分はただ会議に来れば良いんじゃないんだなということを意識できるんじゃないかなと思います。
佐山委員	パソコンの公的な資格って何かあるんですか。
大内主事	当センターでは出していませんが、Microsoftの資格はあります。
佐山委員	学校の現場で、ホームページがあるんですが、人事異動で得意な人がいなくなってしまうと、丸っきり駄目になってしまう現象が起きていまして、はっきりと公的な資格で分かるものがあれば、人事異動の時にそれを考慮しながら異動できるんですよ。今はそれがありませんから、1つ1つ確認しながらやっているのだから、非常に非効率なんです。今、教育長会議でも話題になっているんですけども、小学校の先生でピアノが弾ける人と弾けない人とで、必ず人事の中に出てくるんですよ。たぶんパソコンの操作能力も必ず人事の中に入ってくるものだから、視聴覚教材センターにお願いすることではないかもしれませんが、もしそうした操作技術の明確な資格ができあがると良いかなと思います。
黒澤主幹	これをある程度クリアすれば何級とかがあれば、佐山先生が仰ったような選択ができるかもしれないのですが、今のところそういったのがなくて、できる人はできる、できない人はできないという中で異動をされている現状からすると、いる内はすぐホームページが充実するんですが、いなくなった途端に閉ざされてしまう感じで、逆に移った先のところは復活するというような現象があると思います。

佐藤教育長	昔は視聴覚初級講座研修修了認定証というのがあったんですよね。
黒澤主幹	メディアカリキュラムⅠというのがありました。
佐藤教育長	事務所とタイアップした視聴覚教材、ICTの研修はないんですか。
黒澤主幹	ないです。県自体もなくなっています。
佐藤教育長	これはあまりにも情報の中身が、インターネット時代になってから、スマホやタブレットになってから変化があるんですよ。追いつけないくらい進歩のスピードが速いんですよ。これを食い破っていくには、ここの事務局にいる方々でも、ICTの講話をしてくださいと言っても、タブレットをどう授業で使えるかを教えて欲しいと言っても難しいんですよ。私も事務所に言いますが、研修会をしましょう。
黒澤主幹	過去にらいむ・ネットを始める前に、パソコンに詳しい先生方に集まってもらって研究部会を作ってもらって、らいむ・ネットができあがったんですが、そのような感じで市町から集まっていただいて、話し合いをして研修会をするなどをすれば良いと思います。
佐藤教育長	各市町でもあるかと思いますが、ICT機器のワンセットくらいは視聴覚教材センターで整備しておいて、これはデモ機として講習会や研修会で使えるような形で。スマホやタブレットからプロジェクターにすぐ映像が行くように。プロジェクターはそんなに高くなくて買えるんですよね。手軽に写せるもので備えておいて、そんなに費用がかからなければ5台や10台を揃えてもらって。今はスクリーンもないんですよね。
黒澤主幹	白い壁があれば。
佐藤教育長	こうした機材をうまく活用すれば、非常に能力的に高まると思います。しなくちゃいけないでは、既に後手に入っている。遅れてはいけない。これをうまく使いこなした市町の子どもは、強力な武器を手に入れている。仙南2市7町はその後手になれば、かなり遅れてしまうと思うので、それを考慮に入れて欲しいと思います。
	<質疑なし>

1.1. 次回教育委員会定例会の日程について

佐藤教育長	平成28年11月30日午前10時から、次回の定例会を実施いたします。
-------	------------------------------------

1.2. その他

○ 平成28年度全国自作視聴覚教材コンクール入賞について

黒澤主幹より資料3にてご説明申し上げます。

平成28年8月8日・9日に行われた平成28年度全国自作視聴覚教材コンクールに、仙南地区からは6作品を出品し、うち1作品(大脇賢次氏[柴田町]「木の命を活かす」<映像教材>)が中学校部門で入選した。

(質 疑)	<質疑なし>
---------	--------

○ 平成28年度仙南地域広域行政事務組合教育費補正予算(第1号)について

水戸教育次長より別紙資料4にてご説明申し上げます。

今回の補正の要点は前年度繰越金の処理である。

(質 疑)	<質疑なし>
---------	--------

○ 平成 28 年度仙南地域広域行政事務組合仙南芸術文化センター特別会計補正予算（第 1 号）
について

水戸教育次長より別紙資料 5 にてご説明申し上げます。

今回の補正の要点は前年度繰越金及び確定した国庫補助金の処理である。

(質 疑)	<質疑なし>
---------	--------

13. 閉 会 午後 11 時 25 分

上記の会議の顛末を記録し、その内容が真正であることを証するためにここに署名する。

平成 28 年 11 月 30 日

教 育 長

署名委員